2018年7月3日(火)　朝日新聞［第2岡山］

犯罪被害者遺族「支援の輪つなげて」

娘奪われた思い、川崎医短大生に語る

犯罪被害者遺族が置かれる状況を知ってもらうための講演会が6月25日、倉敷市松島の川崎医療短大であった。被害者遺族自らが語る体験談に、医療などを学ぶ学生ら約200人が静かに耳を傾けた。

「犯罪被害者遺族のことを別世界のことだと思っていた」。この日の講師は、兵庫県加古川市で2015年、長女（当時20）を知人の男に殺害された女性。娘との日々を振り返りながら涙ながらに語り始めた。

「愛くるしくて可愛い娘」をある日突然奪われた。夢を追いかけ、大阪で暮らす娘の帰省を楽しみに待っていた矢先の事件だった。「娘の笑顔と夢と未来を、私たちに生きる希望を返して欲しい。この思いはずっと私が死ぬまで変わることなく続く」

事件後、臆測や興味本位による根拠のない話があふれかえったという。女性は当時の状況について「私たちは報道、ＳＮＳで何度も殺され続けた」と表現。「誰もが第２、第３の加害者になる」と訴えた。

犯罪被害者遺族による講演を聴く学生たち＝倉敷市松島

過酷な状況の中、強い味方となったのは、同じ境遇の被害者遺族らだった。「思いやりのあふれる優しい言葉が凍り付いた心に温かいものをくれた」

講演の最後、学生たちに「私が受けた素晴らしい支援の輪を岡山から全国につなげて欲しい」とのメッセージを送った。同短大医療介護福祉科１年の原瑞希さん(19)は「将来は患者の心に寄り添って、話を丁寧に聞くことを心がけたい」と話した。

（華野優気）